



## 「サイエンスを現場に！」



日本ウマ科学会  
会長

青木 修

明けましておめでとうございます。

昨秋の育成技術講習会（BTC 共催）のどさくさにまぎれて、本誌編集部から寄稿の依頼があり、その説得の巧みさに脱帽し、パソコンに向かうこととなりました。新年早々、お堅い話で恐縮ですが、最近の競馬業界を振り返ってみましょう。

相変わらず競馬を取り巻く経済環境は厳しい情勢ですが、それでも競馬人一丸となつての努力は、日本馬の実力を高めつつあり、海外のGIレースでの日本馬の活躍もしばしば報じられるようになってきました。しかしながら、今度こそはと期待された凱旋門賞での日本馬の惜敗、なんとも悔しい結果でした。3歳牝馬初挑戦の斤量有利なハープスターも、世界最高レイティングのジャスタウェイも、欧州の馬場向きとみられていたゴールドシップも、本来の力を発揮できませんでした。このことは、まだ日本馬が世界のトップレベルに定着したとはいええないことを示しています。競馬先進国の長い歴史が培った伝統という壁を、後発の日本の競馬が乗り越えるには、まだまだ時間と努力が必要なようです。その努力の一つが馬の飼養管理技術や育成・調教への科学的成果の応用です。

本来、学問や研究の成果は、一般社会や現場の人たちに役立たなければ意味がありません。学問や研究の成果の中には、その分野の専門家に活用されて一般社会に還元されるタイプもあります。たとえば、獣医師や装蹄師の技術などに活かされて現場に普及するケースです。また、現場の技術革新に直接役立つ場合もあります。競馬業界に限れば、育成・調教技術は科学的な成果が活かしやすい領域といえるでしょう。しかし、現場では試行錯誤と感性に頼るところが大きく、競走馬の運動科学やスポーツサイエンスの成果が、スムーズに現場に普及浸透しているわけではありません。それらの成果は通常、学会活動や専門誌を経由して社会に発信されますが、それらの表現や内容は専門的すぎて、実務家や現場人には難解であり馴染みにくいのが実情です。

そんな学会活動の本質的な課題を打破しようという意図を抱いて組織されたのが、日本ウマ科学会です。ウマに携

わる誰もが気軽に参加して、お互いに情報を発信し、情報を共有する。そこにこそ、次の世代を育てるノウハウが積み重ねられるのではないのでしょうか。

この学会は、1990年に設立されました。当時、国際馬運動生理学学会（ICEEP）が4年に一度、ホスト役を買って出た国で盛大に開催されていました。この国際会議に毎回のように参加して、貴重な研究成果を世界に発信していたJRA競走馬総合研究所のスタッフに、第5回ICEEPの日本での開催が持ちかけられ、これを実現するため、帰国した彼らと国内の獣医系大学の先生方が発起人となり、JRAのバックアップを背景に200人余りの会員が集って日本ウマ科学会が発足しました。

ICEEP 5の日本開催を契機に発足した本学会ですが、その趣旨は「獣医学や畜産学に限らず、ウマに関する人文科学や芸術なども取り込んで、幅広い分野の会員を募り、相互に情報を発信するとともに、研究者と実務者が一堂に会して意見を交換し、現場のニーズに対応した学術や技術の向上と普及を促進する」という壮大なものでした。これは、ウマという特殊な立場の動物をテーマとする学会としては理想的な形態といえますが、様々な立場や領域に所属する会員たちのすべてが満足する学会活動を実現するのは大変難しいことでもあります。それでも歴代の会長をはじめ、役員各氏や関係者のご努力により、ここまで事業内容は年々充実し、会員も800名を超えるまでに拡大し、ユニークな学会として着実に発展してきました。

その日本ウマ科学会の第5代会長に選任された私としては、初心に立ち返り、今後の学会運営に努力するつもりです。この学会がICEEPの日本開催を契機に設立されたこと、育成・調教の領域こそ運動科学の成果を利活用しやすい現場であることを思えば、競走馬の育成・調教に携わる読者各位には是非、私たちの学会活動に前向きにご対応いただきたく、末尾に次の言葉を添えて、新年の挨拶に代えさせていただきます。

強い馬づくりを目指して今こそ“サイエンスを現場に！”